

ライオン歯科衛生研究所 予防歯科セミナー

一人ひとりに寄り添う、歯科医療をめざして
～ 65歳以降の患者さんに診療室でできること～

2024年4月14日(日)

主催:公益財団ライオン歯科衛生研究所

後援:公益社団法人日本歯科医師会

公益財団法人日本歯科衛生士会

講演 1

地域で歯科ができる口腔・栄養・リハビリテーション

糸田 昌隆 先生

大阪歯科大学医療保健学部口腔保健学科 教授

大阪歯科大学附属病院口腔リハビリテーション科 科長 教授

近年、医療・介護領域では、三位一体の取組と言われる、リハビリテーション（以下、リハ）、栄養、口腔への一体的取組が推進されています。その目的は、リハ、栄養、口腔への一体的取組を運用・実施することで、より効果的な自立支援・重度化予防につながることを目的としています。

対象者は高齢者を主体に、地域高齢者、介護保健施設入所者、通所施設利用者、一般病院入院、リハ病院などの入院患者など、様々な医療・介護現場で実施されています。今年度の医療保険・介護保険の同時改訂においても、明確に明記され収載項目も広い現場で算定できるよう政策誘導が行われています。

歯科領域において歯科診療所の歯科医師・歯科衛生士・歯科技工士は、主として歯科訪問診療を行い、合わせて施設、病院、地域等で口腔管理（口腔衛生と口腔機能）を多職種と連携しながら実施することが求められています。

具体的には歯科の専門性を活かした対応が必要とされ、高齢者、有病者、要介護者等の特性を踏まえ、特に口腔の担う機能である口腔機能や嚥下機能と、口腔衛生の維持改善を通じて、合わせて多医療職との協働による全身管理を行うことによって、経口摂取の維持と誤嚥性肺炎等の予防を行います。また栄養とリハビリテーションの基本的な対応法を理解し、対象者への指導と多職種との協働が必要となります。

今回のセミナーでは、高齢者の栄養・リハ（運動）の特性やその対応法や注意点、口腔機能である咀嚼・嚥下機能と口腔衛生の効果的な維持改善への対応法についてお話しします。また心理的特性からくる口腔機能低下の特徴や、生活機能の低下への評価や対応法。歯科医療者としての壮年期から高齢期にある成人への、歯科的対応の考え方などをお話しいたします。

ご聴講いただきます皆様にとって、少しでも明日からの臨床の一助となりましたら幸いです。

糸田 昌隆 先生

ご略歴

- ・ 1988年 岐阜歯科大学卒業 歯科医院勤務
- ・ 1990年 大阪歯科大学 補綴学第2講座入局
- ・ 1995年 わかくさ竜間リハビリテーション病院 歯科医長
- ・ 2003年 わかくさ竜間リハビリテーション病院 歯科・リハビリテーション科 診療部長
- ・ 2017年 大阪歯科大学 医療保健学部 口腔保健学科 教授

大阪歯科大学附属病院 口腔リハビリテーション科 科長 教授

最近の著書

- ・ リハビリテーション栄養：口腔の全体像とリハビリテーション栄養，口腔と栄養
医歯薬出版 2023.
- ・ 口腔ケアガイド：第3章口腔の構造と機能，4咀嚼と嚥下機能，メヂカルフレンド社 2023.

講演 2

チェアーサイドからベッドサイドまで ～「かかりつけ歯科医院」の役割～

細野 純 先生
細野歯科クリニック 院長

深澤 佳世 先生
細野歯科クリニック 歯科衛生士

今後、歯科医院に来院される高齢患者さんは確実に増加し、認知症の患者さんが通院する機会も多くなります。「かかりつけ歯科医院」に来院する高齢患者さんを、「生活機能の変化パターン」からみると、健康状態、自立度は様々です。口腔機能は「いのち」「からだ」「こころ」といった「くらし」に不可欠な機能で、高齢者の「生きがい」や「自己実現」を支えているともいえます。口腔機能の低下を早期に発見し、口腔健康管理、食支援を通じて、フレイルの予防、自立生活と社会参加、社会への貢献寿命の延伸につながる支援を意識した対応が歯科衛生士にも求められます。そのためには、年齢だけを基準に対応を考えるのではなく受付での応対時、診療中の動作などを丁寧に観察し表情や仕草の些細な変化や生活機能や精神面の状況の変化を見逃さないように努めます。「いつもと違う？」ということに気づき患者さんの尊厳を大切にしながら対応を医院全体で考え共有していくことが大切です。

また、患者さん本人だけではなく、ご家族ともコミュニケーションを積極的にとり、患者さん本人が気づいていない心身の状態や食生活の変化をつかむことが、加齢変化や自立度に合わせた歯科保健指導や食支援への提案につながります。これからの地域包括ケアシステムの深化、推進の中で、「かかりつけ歯科医院」は、地域連携を前提に、リハビリテーション・機能訓練、栄養管理、口腔管理の一体的な取り組みを支援する「通所リハビリテーション的通いの場」のような考え方も必要です。通院が困難になった場合には、在宅歯科医療に移行し、継続的に口腔健康管理が提供できるような体制づくりが求められます。通院が可能な時期に、積極的な歯科治療を進めるとともに、チェアーサイドからベッドサイドへスムーズに移行できるように、患者さんにご家族に訪問診療についての説明などをしておくことも大切です。気を付けたいポイントや歯科衛生士が抱える悩みへのヒントなどを考えてみたいと思います。

細野 純 先生

ご略歴

- ・昭和50年3月 日本歯科大学卒業
- ・昭和50年4月 虎の門病院専修医
- ・昭和52年4月 虎の門病院歯科
- ・昭和55年8月 東京都大田区に細野歯科クリニック開業
- ・平成 6年4月 (社) 東京都大田区大森歯科医師会理事
- ・平成13年4月 (社) 東京都歯科医師会高齢者保健医療常任委員会委員長
- ・平成21年4月 (公社) 東京都歯科医師会地域保健医療常任委員会委員長
- ・平成25年7月 (公社) 日本歯科医師会地域保健委員会委員
- ・平成29年8月 (公社) 日本歯科医師会地域保健委員会副委員長
- ・令和元年6月～令和5年6月迄
(公社) 日本歯科医師会 地域保健 I・II 地域連携 担当理事
- ・平成28年 母子保健推進会議会長表彰
- ・平成29年 厚生労働大臣表彰

主な著書

- ・老年歯科医学 第2版(分担執筆)：医歯薬出版 2022,3
- ・「はじめよう在宅歯科医療」(監修執筆) 在宅療養を支える“かかりつけ歯科医の役割”と“地域包括ケア”：デンタルダイヤモンド社 2015,3
- ・実践介護予防「口腔機能向上マニュアル」(監修執筆)
：財団法人東京都福祉保健財団 2006,4

深澤 佳世 先生

ご略歴

- ・1983年生まれ
- ・接客業、事務職等を経験したのち、歯科衛生士を目指す。
- ・2015年 歯科衛生士学校を卒業し、一般歯科で勤務。その後歯科衛生士養成校に入職し、その中で訪問診療に出会い以後訪問診療をメインに歯科衛生士業務に携わる。
- ・2019年 健康長寿医療センターでのフィールドワークや大田区の検診事業等にも参加。

講演 3

高齢者に伝わる予防歯科とは：「わかる」を目指そう！

原田 悦子 先生

筑波大学人間系心理学域 教授

筑波大学CUARみんラボ 研究代表

いま、日本はまさに超高齢社会の真只中にあります。また高齢者は口腔ケアの効果的な指導を人一倍必要としている人たちでもあります。皆さんは日常のお仕事の中で、高齢者とのコミュニケーションに違和感や難しさを感じたり、結果として指導がうまくいかなかったりという経験がありますか？

健康な高齢者であっても、加齢によって認知過程、すなわち「外界・内側の情報を処理し、うまく利用・対応する過程」は変化します。実験認知心理学の研究からこうした認知的加齢変化は単純ではなく、複数の要因が絡み合った複雑な現象であることがわかってきました。大きくは、感覚知覚機能・身体運動機能の低下、注意制御や記憶のような認知機能そのものの変化、その人がもっている概念や知識の過不足、そして何にどのような価値を感じて行動するのかという相違、という4つのレベルの要因が相互に絡み合いながら、「現象として表れてくる高齢者の行動の変化」にあると考えられます。

本講演ではそうした特性を持つ高齢者とのコミュニケーションを「うまく進める」ヒントをご一緒に考えていきたいと思えます。面白いことに、そこで見えてくる「コミュニケーションのコツ」は、おそらく高齢者にのみ当てはまるものではなく、患者さんみんなにとって「より容易に、より深く理解できる」方法になると考えられます。高齢者さんとのコミュニケーションの達人になることによって、みんなにとって「わかる」予防歯科を考えてみましょう！

原田 悦子 先生

ご略歴

- ・ 山口県生れ。筑波大学人間系心理学域 教授（2024年4月より客員教授）。
- ・ 筑波大学第二学群人間学類（心理学主専攻），同大学大学院博士課程心理学研究科を卒業，教育学博士（筑波大学）。
- ・ 日本アイビーエム(株) 東京基礎研究所にて認知工学グループ研究員として勤務の後，法政大学社会学部にて専任講師，助教授，教授を経て，2010年より現職。

主な著書

- ・ 「医療の質・安全を支える心理学——認知心理学からのアプローチ」 誠信書房。2021.
- ・ 「認知心理学」（シリーズ心理学と仕事3） 北大路書房。2021.
- ・ 「事故と安全の心理学：リスクとヒューマンエラー」 東京大学出版会。2007.
- ・ 「<家の中>を認知科学するー変わる家族・モノ・学び・技術ー」 新曜社。2004.
- ・ 「人の視点からみた人工物研究」 認知科学モノグラフ(6) 共立出版。1997.

パネルディスカッション

65歳以降の患者さんに診療室でできること

西沢 邦浩 先生

日経BP総合研究所 客員研究員

「日経ヘルス」元・編集長

講師の先生方の講演内容をふまえ、一人ひとりに寄り添う歯科医療をめざす上で65歳以降の患者さんに地域の歯科診療室でできることを、多職種連携による口腔管理や高齢患者さんとのコミュニケーションのあり方などの点からディスカッションしていきます。

西沢 邦浩 先生

ご略歴

- ・ 小学館を経て、91年日経BPに入社
- ・ 2004年～ 『日経ヘルス』 編集長
- ・ 2008年～ 『日経ヘルス プルミエ』 編集長
- ・ 2011年～ 日経BPビズライフ局プロデューサー
兼 株式会社テクノアソシエーツ ヴァイスプレジデント
- ・ 2016年～ 日経BP 総合研究所マーケティング戦略研究所主席研究員
- ・ 2018年～ サルタ・プレス設立（代表取締役）
日経BP 総研研究所メディカル・ヘルスラボ客員研究員

主な著書

- ・ 「日本人のための科学的に正しい食事術」 三笠書房
- ・ 「100年ライフのサイエンス」 日経BP（共著）
- ・ 「ヒットする！ 食品の機能性マーケティング」 日経BP（共著） 他

LINE（ライン）お友だち登録のご案内

ライオン歯科衛生研究所のLINEでは、歯科衛生士の皆さまへ定期的にお役立ち情報やセミナー情報などを配信しています。毎日の診療のすきま時間や通勤途中などに是非ご利用ください。

▼▼▼LINEのお友だち登録はこちらから▼▼▼



<https://lin.ee/rWFcNg1>

公益財団法人 **ライオン** 歯科衛生研究所



<https://www.lion-dent-health.or.jp>